

明治実業家列伝②

早川智寛

仙台市博物館 市史編さん室長 菅野正道



近代化を支えた土木官僚

明治時代、東北振興のための国家プロジェクトとして、鳴瀬川河口に近い野蒜に大きな港を建設する計画が立てられました。これは、港の建設とあわせて、北上川や阿武隈川と接続する運河の整備、そして山形に通じる峠道の整備を行い、東北地方の物流網を構築しようという壮大な計画でした。

この計画に官僚としてかかわった人物に、早川智寛がいました。弘化元（一八四四）年に九州小倉藩士の家に生まれ、大蔵省の官僚となった早川が、野蒜築港の工事主任として宮城県にきたのは、明治十一（一八七八）年のことでした。一時期、三重県に転任となった早川は、明治十三年四月に県の土木課長と



明治時代の仙台市役所
草創期の仙台商業会議所も一時期、事務所を置いていたことがある

して再び宮城県の地を踏み、宮城県の近代化に大きな役割を果たすことになりました。

土木課長としての早川は、道路整備や治水工事を積極的に進めました。その結果、早川が就任した頃に年間六万円前後であった県直轄の土木工事は、明治十年代末には約二倍になっていきます。同じ時期に県の財政支出の伸びは二割程度でしたから、土木費が突出して伸びたのは明らかです。

また、徹底した現場主義を貫いた早川は、県内各地を踏査し、工事中の所だけでなく、将来的に道路開削や港湾整備が見込まれる場所での事前測量を盛んに実施したのです。

この間、野蒜の築港事業は台風の被害などにより、断念に追い込まれました。一方で、県内各所で着手された土木事業は早川の手腕によって順調に進み、宮城県内の近代化は順調に推移したのです。

実業家として

明治十九年、早川は突然に職を辞し、土木会社を設立し、実業家の道に転じました。しかし、この会社では経営方針をめぐって内紛が起きたため、早川はさっさと見切りをつけて会社を解散し、改めて早川組を設立します。鉄道工事を主たる業務とした早川組は、東北地方や、北海道などで鉄道工事を請け負い、急成長を遂げるようになります。

そんな中、早川の親友が鉄道局長官に任じられるという出来事がありました。鉄道局長

官と鉄道工事事社の経営者が友人関係にあるという事態を心配した早川は、明治二十六年、思い切って会社を解散してしまいます。会社の財産は、自分と幹部職員、社員で三分し、自分は蔵王山麓に土地を求め、牧場の経営に転じます。この際、彼が得た財産が多いものではなかったことは、数年後、早川の行を徳とした元社員たちが、銅像を献呈したことから、はっきりと窺うことができます。

ひげの市長

しかし世間は、早川を一牧場主にはとどめませんでした。明治三十六年、早川は仙台市長に推薦され、以後四年間、その重責を全うします。当時の市政は低迷気味でしたが、早川は行政の刷新を目指すと共に、教育や産業振興政策を重視し、あわせて市道の整備にも力を尽くしました。

早川の現場主義は健在で、時間を見つけては人力車に乗り、市内を巡回して廻りました。白髯を蓄え、市政のために東奔西走する市長を市民も「ひげの市長」として慕ったのです。おそらく、戦前の仙台市長で最も市民に親しまれたのは早川市長だったのではないのでしょうか。

このように、早川は、官僚、実業家、政治家として大きな業績を残しましたが、中でも忘れられない履歴が二つあります。

一つは、仙台湾岸に作られた運河を「貞山運河」と名づけたことです。

そしてもう一つが、明治二十四年に仙台商業会議所（仙台商工会議所の前身）の初代会頭に就任したことです。常に新しい時代を見すえ、現場を大事にし、澆刺とした精神で産業振興を志した早川は、近代化の中で経済界を支える役割を担う商業会議所の基盤を作るには、最適な人材だったと言えるでしょう。

仙台市史

最新刊
好評発売中

通史編8 現代1

戦災からの復興—
歴史的な大変化を遂げた、仙台の戦後二十余年のあゆみ
◆A5判 599頁 オールカラー ◆定価3000円(本体2858円)

お求め先 県内主要書店・仙台市博物館/仙台宮城県教科書供給所 TEL.022-235-7181 FAX.022-235-7183
お問い合わせ先 仙台市博物館市史編さん室 〒980-0862 仙台市青葉区川内26番地 TEL.022-225-3074

昭和20年代後半の東一番丁

